

後ステロイドの使用により皮膚症状は軽快している。

21. 蛍光分析によるセレン (Se) 測定法とその臨床的意義

中西 明子

セレン (selenium) は、生体に必須な微量元素である。各種担癌患者において血中セレン濃度の低下が認められることより癌発生の関連が示唆されるなど、最近、微量元素に対する関心が高まるとともに、その臨床的意義が注目されている。教室においても、血清中のセレン濃度を簡便に測定することにより、その臨床的意義を検討している。現在行っている検討項目は、1. 担癌患者における腫瘍マーカーとしての可能性、2. 炎症性腸疾患におけるセレンの役割、3. 長期静脈栄養実施に伴うセレン欠乏症の予防等について、研究を行っている。

対象は、各種癌患者、在宅 IVH 施行者、長期経口摂取不能者、炎症性腸疾患患者である。また、現在一般に認められている正常値がないため、良性疾患患者、健常ボランティアを用いてその正常範囲の決定を行っている。

方法としては、原子吸光法、蛍光法、比色法などがある。現在まで前2法での測定を試みたが精度と簡便さを考慮して蛍光法を採用し測定を続けている。

その測定結果より、1. 正常範囲の決定、2. 各種疾患における濃度、3. 在宅 IVH 患者の静脈投与における動態等について、若干の結果を得たので報告する。

22. 大腸癌の肝転移予知ファクターとしての Laminin の意義

齊藤 登

ラミニンは基底膜に存在する分子量80~100万の糖蛋白質で、癌の浸潤や転移に関与するといわれる。大腸癌の肝転移機序を解明するためラミニンの動態を血清学的および病理学的側面よりアプローチしている。

血清ラミニン濃度は術前の患者血清をラミニン P1 キットを用い、RIA 法にて測定した。これまで80例を測定し、そのうち40例につき CEA, CA19-9, CA125 と比較検討した。診断率では CEA に匹敵し、肝転移におけるラミニン陽性率は sensitivity 86%という成績であった。一方、組織ラミニン染色は術直後の標本を凍結切片、エタノール固定、ホルマリン固定の3方法で酵素抗体法を用いて染色している。現在、凍結切片のものが最も良好に染まり、原発巣と浸潤巣に分け染色される程度を5段階に分類し血清濃度と合わせ評価、検討している。

以上より血清ラミニン濃度測定と組織ラミニン染色を用い、ラミニンの肝転移予知能に関する研究成果を報告する。

23. 経口腸管洗浄液による注腸二重造影検査の新しい前処置法

宮崎 要

注腸二重造影検査の新しい前処置法を開発する目的で外来患者600例を対象として臨床研究を行なった。まず PEG-ELS (Golytely)、各種下剤、低残渣食を組み合わせた14の方法を設定し、そのうち最も優れた前処置法を決定した。ついで同方法と従来の Brown 変法とを無作為化臨床試験を用いて比較検討した。

結果：1. 14の方法のうち PEG-ELS 3,000ml, ラキソベロン10ml, ポンコロ食を組み合わせた GLB 法が最も優れていた。2. 無作為化臨床試験では GLB 法が Brown 変法により優れた前処置効果を認めた ($p < 0.001$)。3. 特に GLB 法は下行結腸, S 状結腸直腸において腸管洗浄効果, 総合診断能力が Brown 変法より優れており, mucosal coating は同等であった。

以上より, GLB 法は注腸二重造影検査の優れた前処置法であると考えられた。

24. 術後合併症発生率から見た術前術後栄養管理の役割

(朝霞台中央病院 外科) 金 英宇

1988年9月より1989年8月までの間に、待機手術を目的として、当科に入院した胃癌、大腸癌、直腸癌患者に対して、術前の栄養管理が術後の合併症の発生率に対して関与するか否かについて検討した。

術前に IVH を7日間以上受けたもの、4日間未満のもの、術前に IVH を受けていないものの3群に分けて、それぞれパラメーターとして、体重、握力、上腕周囲長、三頭筋周囲皮膚厚、一般血液生化学検査、トランスフェリン、プレアルブミン、レチノール結合蛋白、C3、遅延型アレルギー反応を入院時、手術前日、手術後2週間目に測定した。

その結果術前に7日間以上の栄養管理を行った群に、明らかに感染性の合併症発生率が少なかったため、各パラメーターとを比較検討し報告する。

25. ヌードマウス転移モデル作製と CTL 移入による効果

三橋 牧

50歳、男性胃癌患者の転移リンパ節よりヌードマウス可移植性 cell line を樹立し、その性状について検討した。産生する腫瘍マーカーは、臨床所見と一致し、